

友情の記念碑

——『ボミューニュの男』論考——

山 本 省

キーワード：友情の記念碑 音楽の力 幽閉と救出 田舎と都会 牧神3部作

I. はじめに（物語の背景、物語の特徴など）

『丘』と『二番草』のあいだに書かれたこの物語『ボミューニュの男』(*Un de Baumugnes*)はプレイヤッド版で100頁程度の中篇である。ジオノ自身「牧神3部作」と形容したこの3作品はそれぞれきわめて個性的であるが、『ボミューニュの男』は友情を称揚するための叙事詩的な物語で、とりわけ音楽が重要な役割を担っている。変幻自在なアメデの語りが物語を紡ぎ出していくこの作品は、ジャン・ジオノ(1895-1970)の全作品のなかでも友情と音楽を強調していることでとりわけ異彩を放っている。

全体は13の章から成り、アメデとアルバンの出会いではじまる物語は、両者の別離で幕を閉じる。2人を結びつけたのはアンジェールという女性であり、この女性の捜索、発見、そして救出が物語の中心部分を構成する。中央の第7章、嵐の夜にアメデがアンジェールを発見する場面に至るまで、緊張感がしだいに高まっていく。アルバンの奏でるハーモニカの音楽の神通力のおかげで彼女は地下室から救出される。幽閉と脱出の物語であり、アルバンの全生涯を通しての最高の自慢話でもある。

物語のすべてをアメデの言葉が紡ぎ出していく。力強く清廉潔白なアルバンはアメデの友情を誘引するに足るだけの人物ではあるが、生命が躍動する音楽を演奏する場面を除くと、彼が積極的な行動を企てるということはほとんどない。万事がアメデの差し金で動く。主人公は、やはり世の中の複雑な事情に通じ、この物語の原動力になっているアメデだと言うことができる。「素晴らしい語り手であるアメデは、それまで語ってきた小説の最後で『物語は以上の通りだ』と言って幕を閉じる。」¹

なお、アルバン(Albin)は魂の白いこと(清浄、無垢)を、アンジェール(Angèle)は天使(Ange, Angélique)を想起させるよう名付けられている。さらにアメデ(Amédée=Amadeus)は神に愛されている存在という意味を含んでいるようにも考えられる²。それほどアメデは縦横無尽に活躍できる人物に設定されている。

高地の村(ボミューニュ)と海辺の大都会(マルセイユ)の対比、音楽の秘めている絶大な可能性、男女の愛情、農民の頑迷固陋といったテーマが扱われているが、と

りわけ友情に記念碑的な役割が与えられている。タイトルのすぐあとに「リュシアン・ジャックとマクシム・ジリウーの友情に」と2人の親友への献辞が記されていることから、友情が最大のテーマであるということは自明である。アメデという初老の日雇いの男が、青年アルバンとの友情を物語る「語り」形式の作品に仕上げられている。

ジオノ自身こう語っている。「私の実際の経験を使って、いつか、友情の問題を扱ってみたいと思っているところです。『ボミューニュの男』で不器用なやり方でそれを試してみました。『ボミューニュの男』という作品は、私にとっては、恋の物語というよりもむしろ友情の物語なのです。私に興味があるのは2人の男の友情です。『街道』でもいくらか異なったやり方ですが友情を扱いました。友情の問題は私につきまっています。友情について1冊の本をいつか書くことになるでしょう。」³

なお、綴りが少し異なっているが、ボミューニュ(Baumugne)という村は実在する(オート・ザルプ県の西端にある美しい村サン・ジュリアン=アン=ポーシェヌのすぐ近く)。しかし、この村は物語のなかで書かれているような隔離された高地の集落ではない。村民たちが舌を切り取られたというのは、当然のことながらジオノの創作であり、ハーモニカに特別の意味を与えるためにジオノが思いついた奇想天外な着想である。ジオノの物語で音楽がきわめて重要な意味を担うことはよくあるが、この物語でも、アンジェールを救出するために絶大な威力を音楽は発揮することができた。友情とならび音楽がこの作品の2つの重要なテーマのひとつを担っている所以である。

II. 物語の梗概

この作品の邦訳が入手不可能だという現状⁴では、読者に物語の概略を把握していただくためにも、また筆者が論考を無理なく進めていく上でも、この物語の梗概をまず紹介しておくのが効果的だと思われる。まず粗筋を紹介しておきたい。

場所は作者ジオノが生活していた南仏オート=プロヴァンスのマノスク近辺の片田舎である。日雇い労働者「私」(アメデ)は行きつけのバーでひとりの若者に目をとめる。手痛い失恋の苦痛に打ちのめされているこの若者は絶望の極にあり、故郷のボミューニュという山の中の村に帰ろうとしている。アルバンの打ち明け話を聞くとすぐに彼に友情を覚えたアメデは、アルバンの恋愛成就のために一肌脱ごうと申し出る。

アルバンが恋焦がれている女性(アンジェール)は、都会(マルセイユ)育ちの伊達男にだまされ、マルセイユで娼婦をさせられた挙句、男に捨てられ、故郷の家(ラ・ドゥロワール)⁵に帰ってくるが、不始末をしでかした娘を恥じる父親(クラリュス)は彼女とその乳飲み子を地下室に幽閉している。アメデはその農家に雇われることにより、彼女の動静を探る。彼女の生存が少しずつ明らかにされていくところは、推理小説を思わせる。

彼女が無事生きていることをアメデから知らされたアルバンは、夜、農場の外からハーモニカの音楽を通して彼女に語りかける。彼女はその雄弁な音楽を聴くことによ

り事情を理解する。アメデが差し入れたねじ回しを使って彼女は外に出てくる。待ち構えていたアルバンとともに全員が脱走する。

途中で思いなおし、クラリユスに撃ち殺される危険を覚悟して、4人は農場に戻る。アルバンの自負心がアンジェールをさらって逃亡するのを許さないからであった。アルバンはアンジェールを強奪して立ち去っていくよりも、可能なら両親に祝福されたいと考える。このまま4人で逃走してしまうと、クラリユスはおそらく河に身を投げるだろうということがアメデにも分かっていた。幸い、ぎりぎりのところで、クラリユスは発砲をとどまった。危機一髪のところ、彼らは悲劇を回避することができた。

所持金がないため、はるか彼方の高地ボミューニュまで歩いていくつものアルバンを制して、アメデは切符を買い与え、彼らを汽車に乗せる。有り金のすべてもそれと気取られないようにしてアルバンに与える。数年後、ラ・ドゥロワールを通りかかったアメデはアンジェールの娘（同じくアンジェールという名前である）に出会い、彼女と話す。母親と生き写しの娘の姿を見て、アメデはアルバンに関わる一連の出来事を思い起こす。アルバンたちが数年前に列車に乗り込んだときの別れ（友情が凝縮された無言の別れ）の光景が回想され、物語は幕を閉じる。

Ⅲ. いくつかの主要なテーマ

1. 頑迷固陋な農民たち

アルバンが恋するアンジェールの動静は少しずつ明らかになってくるのだが、最初はともかく何も分からない。アルバンから娘がいるはずの農場の場所を教えられたアメデは、何とかそこで雇われようとして接近していくが、獰猛なクラリユスが彼の前に立ちはだかり、アメデにいきなり銃を突きつける。不始末を仕出かした娘を赤ん坊ともども地下室（地下牢）に閉じこめているクラリユスは、家族の恥辱が外に漏れることを極度に恐れているのである。そこへクラリユスの妻のフィロメーナが現れ、アメデは救われる。この場面を引用してみよう。

彼女は彼[クラリユス]の背中をぽんぽんと叩いた。恐怖心を抱いている馬の背中を叩くような具合に。銃を構えていた腕が下がり、銃は壁に立てかけられた。そこで、私はラ・ドゥロワールに向かって一歩、二歩と敢えて前進した。建物の陰になっているところまで進んだ。鉄製の鉤が物を引きつけるように、私の構想がそこまで私を引っ張っていったのだ。

「何がお望みなのですか、あなたさんは？」

「奥さん、私はこうして仕事を探してまわっています。もしかしたら脱穀の仕事やそれとも何か他の仕事がないだろうかとお訊ねした次第で……」

呆然とした態度で男は自分の足を見つめて、吊り下げた腕をもう一方の腕で撫でさすっていた。

女主人はその腕を見た。

「お互いにおそらく理解しあえるでしょう」と彼女は言った。「ばかなまねはもう止めなさいよ。情けない恰好をもうこれで三か月も続けているのだからね。ところで、いくら払えばいいのでしょうか？」(245)⁶

3年後に発表される『憐憫の孤独』のなかの例えば「失踪した筏」⁷においてジオノは頑迷固陋な住民の例を2つ挙げている。ある裕福な家庭の相続人となった女性と結婚した男は、彼女に証文を書かせたあとで、彼女を殺害し、彼女の富を独り占めしようとする。また妻を亡くした老人のところに甥の家族が同居するようになったかと思うと、間もなく流れのなかで老人の死体が発見される。

クラリユスのように荒れ狂う者の陰には、息をひそめて不幸にじっと耐え忍んでいる存在がある。妻のフィロメヌのおかげで、クラリユスの農場は何とか持ちこたえているのである。右腕を負傷しているクラリユスはほとんど働けないので、実際の農作業は作男のサチュルナンが受け持っているが、彼も1人前の働き手ではない。農場にとって、アメデの登場はかぎりなくありがたいものだったのである。

女将さんは—フィロメヌという名前だったが—一言も言わず、歯を食いしばって、キャベツスープを入れた大きな杓子を炉床から食卓へと運んではどんぶり鉢を満たすのだった。彼女は給仕の順番を心得ていた。最初の杓子は親方に、次はサチュルナンに、さらに私に、最後は彼女自身にというのがその順序だった。衣服で覆われている彼女の身体は痩せぎすで、胸も薄かった。胴着は前がいくらか膨らんでいたが、それは片方だけだった。そこにハンカチが挟まれていたからだ。私がナイフを使って女の顔を彫るとすれば、彼女のような顔になるだろう。雌鶏の首のような彼女の首は、やはり筋ばっていた。しかし彼女の口は普通ではなかった。それはパンの味のするような口だった。彼女の目はつねに湿っていた。鼻の先で悲しみをかぎつけるやり方は、彼女の善良な心を雄弁に語っていた。根本のところでは、彼女と、自分のスープ皿の上に斜めにかがみこみ、腕に少し力がかかると歯を噛みしめているクラリユス、この二人は善良な人間だった。ひじょうに善良な人間だと言ってもいい。しかし実際には、とんでもないことが起こったのだった。そして涙がまるで泉から流れ出るように彼女から流れていた。そして彼の方は銃のことしか眼中にないという有様だった。読者のあなたは、彼らが間違っていると思いますか？(247-248)

夫の横暴に彼女が耐えていたからこそ、農場は何とか持ちこたえていたし、アンジェールも生き延びることができたのであった。そしてアルバンの恋も達成できたのであった。だから、フィロメヌは悲劇が勃発するのを防ぐための最後の砦であったのである。

右腕を挫いているクラリユスを医者連れて行く前に、フィロメヌはアメデに心

のなかのことを打ち明ける。彼女はクラリユスのことを弁解する。

「また、クラリユスには、柔軟な態度で接してやってほしいの。あの人がひどいことを言ってもどうか許してやってちょうだい。耳を塞いでいてほしいの。このあたりで最高にいい男なのです。かつては、と言ってもそれほど昔のことでもないので、気晴らしのためにあの人をわざわざ見に来る人もあったくらいですよ。比べる者がいないほど世話好きなのです。急な作業を要する干草のために駆けつけたり、死者の通夜をしたりしたものです。悪い病気にかかったというので井戸に飛び込んだレ・ルマニエールの男の子を引きあげにいったこともある。ロープにぶら下がっておりていき、男の子を引きあげてきたのはあの人だったのです。たったひとりでやったのよ。狂ったラバのように暴れていた母親のマリアネットを二人の男がやっと抑えつけていました。そこで、レ・ルマニエールの大きな台所のなかで彼女と向き合って一対一で説得したのもあの人なのです。優しくて的確な言葉だけを話したのよ。第二の不幸をあの人のおかげで回避することができたのです……。そして、今では、私たちの番なのです。不幸はあの人よりも大きいのです。あの人が意地悪になるのではないかという恐れを抱くことも時にはあります。しかし、あなたにも分かってほしいし、私も心得ているのですが、あの人が悪事をはたらいたとしても、本当は善行を行おうとしていたのです。ただ、あの人にはもう何も分からないのです。風があの人を勝手に運んでいくのです。何でも変な風に聞えてしまうし、何でも変な風にやってしまうのです。恨みに思っただけはいけません。あの方は根はいい人なのです」

ここで彼女はふたたび口をつぐんだ。大きな沈黙が私たちを包んでいた。
(254-255)

自分が倒れてしまったら、娘のアンジェールもまた死ぬしかないということが分かっているフィロメヌは必死で暮らしている。この不幸が襲いかかった以前は、夫は優しい人間だったということを思い起こしながらも、彼女は絶望的に暮らしている。

2. 田舎と都会

作者ジオノは都会があまり好きではない。マルセイユを一方的に悪く形容することはそれほどないと思われるが、パリのことになると事情は一変する。ジオノにとって、パリは空気が悪く、人々はつねに先を急いでおり、人間らしい生活は不可能な場所である。

しかし、この物語ではマルセイユもパリ並みに扱われており、そこで生まれ育ったルイは手練手管に長けた男、すべてを勘定高く計算する男として描写されている。ルイに連れ出されたアルバンは、牧草地に水やりしているアンジェールの姿をはからずも盗み見てしまう。ルイは彼女に襲いかかり、すでに彼女を意のままに扱えるように懐柔してしまっていたのである。アルバンの言うところを聞こう。

そのとき奴はすべてを言わなかったが、俺がそのあとで言葉の端々や、物音や、さらに一挙にいろんなことを実際に目撃することなどにより、少しずつ自分で集めていった情報によると、奴は浅瀬に通じる道で、夜、彼女を待ち伏せし、頬を叩き、獣に命令するような言葉を使って、力づくで彼女をものにしてしまっていたのだ。今では、奴は毎晩でも自分のやりたいように従順な彼女をものにする事ができるようになっていたのだった。(232-233)

まだ間に合ううちに、ルイの前に立ちはだかつてアンジェールを自分の方に呼び寄せればよかったのだと後悔しても、もう手遅れである。

そのアルバンは、ルイとは対照的に、北の方の山のなかで育ったのであった。

アルバンの村の先祖たちは異端とされるような宗教を信じていたために社会から迫害され、舌を切られ、家財道具を取り上げられ、街道に追い出されてしまった。その結果、村人たちは全員で北に向かい、山の上にかろうじて住むべき土地を見出し、そこに定住することになったという。キリスト教徒から迫害されたカタリ派の人たちの事情が想起されるようなエピソードである⁸。普通の会話ができなくなってしまった彼らはハーモニカに活路を見いだしていく。

そこで、彼らはハーモニカで呼び合うことを考案した。ハーモニカを口の奥まで差しこむと、残っている舌の切れ端で音を出すことができるのだった。

そうして、主婦や、子どもや、雌鶏や、雌牛などを呼ぶのに彼らはハーモニカを用いるようになった。そういう習慣を身につけ、お互いに理解しあうことができた。

日曜になると彼らはヒマラヤスギの大木の下に集まった。長老はハーモニカで説教を行った。舌を持っていたときと同じように長老の言っていることが理解できた。そのためにみんなの目から涙があふれ出た。そのあと、彼らは涙があふれている目を空の方に向けた。そしてそれが彼らの説教となった。一週間のあいだ心を堅固に保つのは素晴らしいことだった。そうして次の週もまた次の週も、彼らの心は安定していた。(229-230)

アルバンは、自分がルイを殴りつけなかったことを後悔する。空に接するほど高いところにあるボミューニュ村ではそうした暴力は教わらなかったとアルバンは悔やむ。すべてを失ってしまったことを自覚したアルバンは、帽子もかぶらずに照りつける太陽のもとで何時間も働いたために、死んだようにぶっ倒れてしまう。そのあと、息を吹き返したところでアメデに遭遇したというわけである。

こうして、海辺の猥雑な町マルセイユと空気が清浄な高地のボミューニュをそれぞれ故郷とするルイとアルバンという2人の対照的な男が紹介されることになった。もちろん、私たちがこれから問題にするのはアルバンの方である。

ジオノがリュール山麓のル・コンタドゥール高原を大いに評価していたということは周知の事実である。そこを舞台にして『丘』、『二番草』、『蛇座』、『喜びは永遠に残る』などの諸傑作が書かれている。『喜びは永遠に残る』の愛読者たちとともに 1935年から 1939年にかけて年に2回、復活祭の前後と9月に、キャンプ生活を送ったのもこの高原である。アルバンの故郷ボミューニュを描くとき、ジオノがル・コンタドゥール高原を参考にしたであろうということはほぼ間違いないだろう。

ジオノが好んだのは、高地の冷涼で芳しい大気、人工的なものがほとんど何もない高原の景観であった。この高原にいるとき、私たちは自然のなかに包みこまれ、全身でもって自然の諸要素を感じ取ることになる。そうした高地で生まれ育ったアルバンは純粋無垢の魂を持った青年として提示されているのである。

3. 男女の愛情

人間の駆け引きや打算というようなことと無縁の生活をしてきたアルバンは、あまりにも純情であった。恋というものを知らないアルバンだったが、アンジェールの清楚な姿をひと目見るとすぐに彼女に恋してしまう。まばゆいまでに清楚で美しいアンジェールが物語にはじめて登場する場面は次のように描写されている。

手綱をぐいと引かれた馬車は店の前で止まった。馬車の止まる音。ついで、一挙に四本の脚が埃のなかに突っ立った。そのあとしーんとしてしまった。的確な動きの丈夫な腕が見えた。それは少女だった。

俺は女ではなくて、少女だったと言っている。この地方の農村の女ときたら、あんたも知ってのとおり、木と石でできているんだ。みんなが持ち運ぶ聖人の像のように、ぎくしゃくと歩く。しかも土の仕事と男たちとの交渉によってすっかり擦り切れてしまっているのさ。しかし、降りてきたのは少女だった。鳩が飛ぶように店のなかに入っていった。俺は横から彼女を見ていた。彼女の鼻と口が光に向き合っていた。それは清らかで美しかった。今でも彼女の横顔が頭のなかに充満しているくらいだよ。

そして店主が包みを持って二輪馬車のところまで出てきた。彼は、こんな女性客が毎晩やって来てくれたら、おそらく猟銃の銃身を口のなかに入れてぶっぱなさなくてすむだろうと考えていたからだった。

手綱をとった彼女が発した「はい、どう」という声は、彼女の他の声とともに今でも俺の頭のなかから消えずに旋回し続けている。さて、足から髪の毛にいたる彼女の全身を上方から月の光が照らしている。彼女の脚や、彼女の柔らかな腹や、胴着が締め付けている彼女の豊かな二つの乳房や、彼女の美しい頭部や、三つ編みに組んだ髪の毛など、彼女の全身が今でも目に浮かんでくる。

俺は聖母マリアなど縁のない種族の人間なんだ。あんただって俺と同じで教会に入るなんてことはほとんどないだろう。だけど、青二才だった頃のことを思い起こせば、あんたもこの地方の教会にあるマリアの美しい像を覚えているはずだ。

かごを作るときに用いる柳の曲線のように、子どもを抱くためになめらかに曲がっている腕や、肩や、視線や、その他ありとあらゆることを覚えているだろうが？」

「そんな風だったのか！」

「処女マリアだよ！」

詳しく話せば長くなる。しかし、そうした姿は一瞬のうちに焼きついたのだ。血筋のいい馬と乗り手の手首、それらはあっという間に通り過ぎていった。流れ星のように飛び去っていったが、俺の頭のなかには残った。それだけ素晴らしい効果を秘めていたってわけだ」(225)

恋心が湧き起こっても、それを実現するためにどうすればいいかという心得のないアルバンは、ルイにアンジェールを連行されてしまったあと、闇雲に身体を動かしてぶっ倒れてしまっただけである。このアルバンを立ち直らせるのがアメデである。さらにアルバンを助けるのが彼自身に備わっていた音楽の技量である。このハーモニカの音楽は故郷のボミューニュで学んだものであり、故郷の遺産が彼を救うことになる。

4. 強奪、墮落、幽閉、搜索、救出

ルイに動物を脅すようにして力づくで調教され、マルセイユで娼婦として不特定多数の男たちを相手に働き、その挙句ルイに捨てられ、帰郷してきたラ・ドゥロワールでは地下室に幽閉されているアンジェールは、誰にも知られず姿を消していく運命にあったと言えるであろう。

彼女の消息を何としてでも嗅ぎつけようとするアメデは、まず最初の夜、「小さな陶器製の小さなカップ」(248)があるのに気付く。明らかに「少女用のカップ」(248)である。

女将さんのフィロメヌが主人クラリユスを医者連れていくあいだ、家には嚴重に鍵がかけられてしまう。アメデは朝のコーヒーのことを思い起こす。彼がコーヒーのために家のなかに入っていくと、「テーブルの隅っこに小さな磁器のカップが置かれていた。若い娘が使うようなカップが。」(259)間もなく、地下室に通じるドアが開き、フィロメヌがそこから出てくる。「彼女はカップの皿を手を持っている。そのさらにはパンが一切れのっている。」(259)その後注意深くなっていたアメデの耳には、「乳飲み子の呻き声」(263)が聞こえてくるように思われることもあった。

稲妻が光る夜、アメデはついにアンジェールの姿を垣間見る。幽閉している娘を、そのような天候のもとでは、クラリユスとフィロメヌとはもう完璧に隠し通すことはできなくなってきたのであった。「そして彼女の姿が金色の光のなかに現れた。おお！牧草地の優しい娘。柔らかな腕で彼女は籠のようなものを支えている。まだ頭が坐っていない赤ちゃんだ。まさに子どものイエスだ！」(269)

彼女の存在を確信することができたアメデはアルバンに吉報を知らせるために彼のもとに駆けつける。こうして、アンジェールを救出するための準備が整った。待ち構えていたかのように、アルバンの音楽が登場する。

13 という意味深長な数の章で構成されているこの作品は、アンジェールが発見される第7章を中心にして、対象的な構造になっている。こうした作品の構造を分析すれば、なにがしかの成果を得られるかもしれないが、筆者はそうした形式の分析に没入することは慎みたい。これまで試みてきた主要テーマに沿って解釈を進めていく。

5. 音楽が秘めている可能性

ボミュニューでは現在でもハーモニカを吹くという習慣が守られており、事あるたびに村人たちは音楽を演奏する。互いに演奏の技量を競い、女や子どもたちは自分の恋人や夫や父親の演奏に聞きほれる。そして最後にはみんなで合奏するという。アルバンの言葉を聞こう。

「しかし今でも俺たちは昔からの習慣を守っている。俺たちはみんな鉄の楽器を持っている。祭りになると、俺たちは、大麦で作ったリキュールの入った壺を数本携えて、牧草地の奥の方のくぼ地に向かう。そしてそこでみんなが自分のモニカを演奏する。俺たちの種族の種をまいてくれた先祖の老人たちに対して感謝の気持を表すために。各人が自分のために演奏するので、女たちは自分の夫や恋人のモニカを聞きつけ、『やはりあの人が一番上手に演奏している』と考える。子どもたちも父親のモニカに耳を傾ける。村の男たちがそれぞれ音楽を奏でているのに、自分の父親のモニカだけに耳を傾けるのだ。そうして、みんなは昔の熟演者たちの舌のことを語り合う。最後に、みんなは美しいメロディを合奏する。それは子どもから爺さんにいたるまでみんな、美しい稜と、冷たくて美味しい水と、健康と力に満ちあふれている頑健な身体に恵まれているという内容のメロディだ」(230)

このボミュニュー村の先祖伝来の音楽がアルバンを助けることになる。

最初の機会にはアンジェールに音楽を聞かせるなどというチャンスに恵まれなかったというようなこともあり、アルバンは失意のどん底に沈むことになった。今度は状況が異なっている。今こそ、自分に具わっている能力を存分に発揮するための時間はたっぷりある。地下室に閉じ込められているアンジェール心のなかで、夜の闇のなかを貫通していく雄弁きわまりないアルバンのハーモニカの音色が意味を持ち、躍動する。アンジェールもその音楽を理解するだけの能力を十全に具えていた。

そのあと、何か音が聞こえてきた。それは山から吹いてくる風のようにでもあり、山の声や、山鳥の飛翔の音や、羊飼いの呼び声や、風を受けてなびいたり盛り上がったたりしている牧草地の背の高い牧草のうなりのようでもあった。

そのあと、静かになり、人が道を歩いているような音が聞こえてくるようだった。ざく、ざく、と。坂道を登る歩幅が大きくゆるやかな足音が、道の石に当たって歌う。そして、その足音に沿って、足音を出迎えにやってきているような垣

根や小さな鈴の動きが感じられた。

それは活気づき、締めつけられ、融けて匂いと音の束になり、そして開花する。犬の吠え声、ばたんと閉まるドア、走る群集、豚、黄色い手を使って泥のなかをよちよちと歩く大きな家鴨。ひとつの村の全体が闇のなかを通過する。桶が床に当たって出す音や、滑車や馬車の音や、誰かを呼んでいる女の声などが聞こえてくる。リンゴのような少女や、両手を腰に当てた女や、金髪の男などが見えてきては、やがて消えていく。

そうしたすべてが、じつに純粹だった！」(285-286)

フィロメヌの心のなかにまでその音楽は浸透していった。音楽が「いびきをかいたり、泣いたり、また無邪気な人たちの呻き声のように聞こえたり、教会の合唱のように聞こえたりした」(287)と彼女はアメデに感想を打ち明ける。彼女には、その音楽がもっと意義深い愛情のことをおそらく語っているということに気付いてはいるのだが、彼女はあえてそこまで口に出して言うことはない。「それはあんたの心が優しくて無垢だからだわ」(288)と指摘するにとどめる。

次の夜も音楽を聴いた彼女はもっと詳しい印象をアメデに打ち明ける。アンジェールが感じたのもこういうことだったにちがいないと類推させるような内容である。

「ああ！私は夢中ですよ」私のすぐそばで彼女[フィロメヌ]はこう言った。彼女の言葉は砕けて、私の顔の上に熱く降りかかってきた！「私は夢中よ！夜のあいだ、あなたの音楽を聞いていたわ。私が自分で考えていながらはっきりと言えなかったいろんなことをあなたは言うてくれた！そういうことがあなたの音楽のなかにつまっていた。あなたから出て空気のなかを飛んできたのよ。だけど、まるで私のなかから出てきているようだった。『あれを聞いている耳は、ついに、本当にいろんなことが聞こえるようになるだろう』と私は考えたのよ。(289-290)

フィロメヌは娘の気持を代弁しているにちがいない。アルバンの音楽は、アルバンの気持をアンジェールに伝え、自分たちが置かれている状況を説明し、そして彼女とともにここから出て行こうと提案し、受け入れられたのである。

音楽がアルバンの気持をあますことなく伝え、下準備が整えられた。3日目の夜、板戸越しに2人は自分たちの声で互いの愛情を確認しあう。

「おそらく彼女は俺の言うことを聞いていなかったのだろう。彼女は相変わらず錠前に身体をくっつけて話し続けて、心を空っぽにしていた。俺は彼女の言うことを聞いていた。心から喜びを覚えながら、ずっと聞いていた。彼女のすべてを容赦するということが分かっていたので。彼女はもうすぐ死ぬ人間のように話した。すべてを告白し、紐の輪を首に通し、そして首を吊る人間のように。

『私には赤ちゃんがいるの。父親は誰だか分からない。私は大勢の男たちの慰み

者だったので。私の身体は汚辱にまみれている。母が食べ物を持ってきてくれるとき、〈母さんを抱擁したい〉と言えないのです。自分の口でやってきたことを覚えているので、母を抱擁したくないのです。あらゆる女のなかで最低の女です。身体の中にも汚れきっています。身体を使ってお金を稼いだのです……』

それに、あまりにも厳しく扱うと、馬を興奮させてしまうことになる。彼女は泣きはじめたので、赤ちゃんが目を覚ましてしまった。

『娘さん』と俺は彼女に言った。『赤ちゃんを寝つかせてやりなさいよ。そのあとで話し合うことにしよう』 (298)

身体は頑丈で心も純朴だが、この世のなかではほとんど何もできないでいたアルバンが、この物語のなかではじめて、自分の思いのたけを音楽にこめて語り、それが相手のアンジェールに通じると言いう離れ業を演じてみせることができた。作者ジオノが音楽に期待しているその度合いの高さが十二分に了解できる光景である。

6. 友情

絶望しているアルバンを見て、アメデはこの青年の力になってやりたいという気持が湧き起こってくるのを感じた。恋にも比べられるような自然発生的な心の動きである。アルバンに対するアメデの友情がこの物語の最大のテーマなのである。ジオノはリュシアン・ジャックをはじめとして素晴らしい友人に恵まれていた。そうした友情をここで顕彰しておこうとジオノは考えたのであろう。

まず、物語冒頭における2人の出会いの情景を引用しておこう。

みんなはそのバーに親近感を感じて集まったものだ。そういう慣わしだった。五、六人寄り集まっては、出かけたものだ。澄んだ水のような目をした背の高い男に目をつけていた。その目は頬まであふれ出て、頬ひげの下で雪のような笑いを浮かべていた。打ち明けて言うと、そのために私は奴にひかれたのだった。奴の目のなかには、何か苦いものが漂っていた。泉の底で腐っていく肉の反映に見られるような陰だ。名前はアルバンという。奴の故郷は山のなかだ。その夕べ、苦しんでいたのはこの男だった。

彼はグラスを前に押しやり、長いため息をもらす。私の胸の二倍ほどある彼の胸のなかから丘の風のような唸りが漏れてきた。

「で、うまく行かないのかい？」手助けができなものかと思い、私は語りかける。

時にはいくらか産婆役にもなる必要があるのだ。そうしてやると、悩んでいる者は楽になるのだ。もう老いぼれの私は何度も悩んでいる若者に手を貸してやったものさ。心のなかではこう考えていた。

「さあ、若者よ、お前さんはそんなことを消化できないぞ。吐き出すがいい」

若者はその悩みを吐き出した。(222)

アメデは時間をかけてアルバンの話を聞く。マルセイユからやって来ていたルイという男、アンジェールという娘、生まれ故郷のボミューニュのことなど。すぐにでも故郷に帰っていかうと考えているアルバンに、アメデは提案する。

「お前さん。私の横に坐って、私の言うことをよく聞いてくれ。あんたに話しておきたいことがあるのだ。あんたは誇り高い男だ。あんたはその誇りを干し無花果のように内部に硬く閉ざして持っている。それは間違っていたのだ。だが、すっかり間違っていたというわけではない。俺というおいぼれにその話をしたのはお手柄だよ。しかし、あんたの言ったことが何も聞こえない男の耳のなかに入ってしまったと思ひこむのは間違いだよ。いいかい、すぐに出かけるのはやめるんだ。いや、私はそんなことを言おうとするつもりじゃない。このままで、あんたの故郷に帰るなど言いたいのだ。マリグラートを立ち去るのはいいことだ。だが、あんたの故郷にこのまますぐに登っていったりするなよ。故郷にたどり着いたら、故郷はあんたを閉じこめてしまうだろう。そうすると解決策はなくなる。この問題が解決するということは絶対になくなる。このことは世界の果ての果てまでこのままだ。あんたが呼吸する空気のなかに混じりこんでしまうだろう。

私の言うことを聞いているのかい？

さっさと故郷に通じる街道を歩いていくんじゃないぞ。よく聞くのだ。不幸な出来事との闘いは、いいかいお前さん、それはいつでも長引くのだよ。しかし、いったん両肩を使ってまともにぶつかりはじめたら、「もうこれでおしまいだ」などと言ってはいけない。立ち上がって、もう一度はじめるのだよ。そうすると、最後には不幸の方が埃のなかに混じりこんでしまうだろう。(239)

このあと、アメデは獅子奮迅の活躍をして、アンジェールが地下室に乳飲み子とともに閉じ込められているということをつきとめる。アルバンが待っているところまで戻り、それを知らせ、今度は2人でラ・ドゥロワールに取って返す。さらにアンジェールのいる正確な場所を突き止めるのに6日かかった。

アンジェールを救い出したときの安堵感、それは念願の仕事を成し遂げた者のみが味わえるような類の幸福であった。このとき、アンジェールと彼女の子ども、アルバンとアメデという4人が夜の闇のなかで勢揃いすることになる。

ポプラの木々の下でデュランス河が穏やかな歌を歌っていた。オレゾンの方角で、葡萄の茎を焼くために火を燃やしているところが二か所あるようだった。ときおり赤くて大きな炎がその方角で燃え上がる。夜の闇のなかに煙が立ちのぼり、馬のたてがみのようにたなびいているのが見えている。

アルバンが低い声で私に呼びかけた。

「おい、同士よ。こちらに来て、見ろよ」

私は近寄る。

それはアンジェールだった！

開いたドアのくぼみのなかに彼女はすくと立っていた。

地下室の奥に火の灯ったろうそくを彼女は残していた。

背に光を受けているアンジェールは、頭と胸を覆う肩掛けに包まれていた。その肩掛けを彼女は腕を交差させてしっかり押さえていた。彼女の鼻も少し見えた。見えるのはそれだけだった。つまり、鼻のいくらかと身体の形だけしか見えなかった。それでも夜の闇よりはずっと美しかった。(301-302)

彼らはラ・ドゥロワールから遠ざかっていくのだが、アメデは農場で殴り倒したクラリユスのことが忘れられない。人情味のあるアメデは、人間は誰でもいいところを持っていると考えている。クラリユスは今では情の薄い、冷酷な人間になりはててしまっているが、それは娘の不始末という彼にとっては前代未聞の災難がもたらした結果なのであって、元来は彼も好人物だったはずなのである。そのクラリユスは、このまま放っておくと、恥辱と屈辱のあまり、デュランス河に身投げしてしまうだろう、ということがアメデにはよく分かる。

アルバンのために地下室から救出したアンジェールは、惨めな過去を背負っていながらも、今なお美しい。アメデにとって彼女は惚れ惚れするまでにアルバンにふさわしい女性である。自分の行為は彼女の美しさによって十二分に報いられた。

アンジェール！

夜の闇から抜け出てきた彼女の全身が今では見えている。彼女のそれまでの生活を生き抜いてきた延長として、さらにこれから彼女の生活がどのように続いていくのだろうか、そうしたことをすべて一身に体現している彼女の姿が見えていた。このような女性は、大地の一部分である。樹木や丘や川や山と対等の存在である。こうした自然物とともに彼女は丸い世界の一部分を構成している。空の星たちが存在するかぎり、彼女は生き続けるだろう！

そのような女性が地下に閉じこめられていたということを、私のように知ってしまったら、そのような行為は罪だと大声で叫ぶしかないであろう！

ああ！大きな果実のようなこの娘は、私は誓って言うが、じつに美しかった。さらに、この愛らしくて慈愛に満ちた乳房や、この食いしん坊の乳飲み子も素晴らしいものであった。パンクラス様は小さな手を出してきて、柔らかなお乳を撫でまわし、マッチの軸のような指でその上を叩いていた。(308)

「かごを作るときに用いる柳の曲線のように、子どもを抱くためになめらかに曲がっている腕」(225、Ⅲ－3の項ですでに引用)を持っているマリアのようだと形容されていた初対面のときのアンジェールが、今では本当に子どもを抱いて現れてきたのであった。アルバンの無意識の願望が、父親が誰か分からないというような奇妙な状

況ではあるが、満たされたことになる。アンジェールはたしかに赤ちゃんを抱いているのである。

しかし、彼らは脱出劇の成功に酔いしれているわけにはいかない。向こうのラ・ドゥロワールでは今何が起ころうとしているのだろうと考えると、アメデの心は揺れ動く。彼はついに意を決してアルバンに言う。「美しい仕事というものは、卑劣なやり口ではじまるなどということは絶対にないものだ」(310)と。友情で結ばれていた彼らは同じことを考えていた。逃げ去るのではなくて、アルバンもできればアンジェールの両親に見送ってもらえることを望んでいたのであった。

高地の村ボミュニューの男には、卑劣な策略はありえない。公明正大が彼の態度である。アメデもまたそういう高邁な精神の持主だからこそアルバンに友情を感じることができたのであった。自殺するかもしれないクラリユスを見捨てて立ち去るのは、彼らには耐えがたい行為であった。

議論の余地はない。彼らは踵を返してラ・ドゥロワールに向かう。彼らの足音を聞きつけると、クラリユスは銃口を向けるだろう。プライドは時には死をも超越するのである。しかし、そこでクラリユスが彼らを殺したのでは物語にならない。何しろ友情と高邁な精神の物語なのであるから。できれば、読者としては、クラリユスも自らの愚を反省し、アメデと仲直りしてほしいと思わざるをえない。

彼は発砲しなかった。

彼を発砲させなかったのはフィロメヌでも、遠くに離れていた娘でもない。

彼はどうしても発砲できなかったのである。

それはじつに大したことなのだ。もうあなたはお分かりかと思うが、それは今その家にいるアルバンの力だった。氷のように純粋なその男の功德によるものなのだ。(314)

彼ら3人のために汽車の切符を買い与え、マノスクの駅で彼らを汽車に乗り込ませたアメデは、今、彼らを見送っている。汽車はまだ出ない。アメデは1歩また1歩と後退していく。アルバンの視線にアメデの熱い友情を感謝しているのが読み取れる。

私は彼を見つめた。彼も私を見つめた。こういう具合に、一言も言葉を交わすことなく、万事が終わった。

私はまず一歩後退した。そしてもう一歩、また一歩と後退していった。しばらくすると、彼の目が見える限界のところまで離れていた。

その時、彼の目がこう言っているのが私には聞こえてきた。

「ありがとう、友よ。友以上の存在よ。ありがとう、幸福をもたらしてくれた爺さんよ。大丈夫だ。大丈夫だよ。もうここまでくれば。これで終わりだ。さあ！ありがとう、本当にありがとう……！」

二つの心に係留されている友情という紐の一方の端に私はいた。もう一歩遠ざ

かると、その紐は切れる。

そこで、私はその一步の後退を実行した。そして私は出発した。(319)

IV. 結論 (素晴らしい後日譚)

何年かたって、ふとラ・ドゥロワールの近くを通りかかったアメデは農園に立ち寄ってみる。山羊の番をしている娘に出会った。名前はアンジェールという。あのアンジェールの娘だということがすぐに分かる。向こうで爺さんを手伝って犁で畑を耕しているのがパンクラスだ。

ここでアメデという男は名乗り出たりすることはない。「父さんは、1週間したら、私と兄ちゃんを迎えに来てくれる」(316)と言うアンジェールに、アメデはこう伝言を頼むのである。

「父さんのこと、好きかい？」

私がそんな質問をしたのがはたして真面目なのかどうか確かめるために、彼女は私を見つめた。

「もちろん、好きよ」

私は立ち上がり、荷物を背負った。

「いいかい」私は彼女に言った。「父さんがやって来たら、アメデからの挨拶を伝えておくれ。覚えられるかな？アメデだよ。父さんはそれが誰なのかすぐに分かるはずだから」

そして、私はそこを立ち去り自分の道を歩んでいった。(316-317)

1週間後に現れるはずのアルバンを待つて旧交を温めてはどうか、という反論が読者から起こるのを見越して、アメデは言う。自分が立ち去っていくのは、アルバンが友だちでないからではない。彼はあまりにも友だちでありすぎる。しかしながら、彼には彼の生活があるし、自分にも自分の生活がある。アルバンが相変わらず堂々と暮らしているということを知るだけで、アメデは十分に満足だというわけである。アメデの態度は〈友情のダンディズム〉とでも形容するのにふさわしい。

しかし、もう友だちではないということについては、話は別だよ！つまり、事実はその反対だ。彼は私にとってはあまりにも大きな存在だ。だから、私のなかで少しずつ彼を殺していき、現在の彼の状態にしていく必要があった。ほとんど名前も知らないような、ボミューニュの男になってもらわねばならないのだよ！

幸福というものは、あなたも知っている通り、法螺吹きたちをつないでおくための最良の紐だよ。

奮闘し、公明正大な身体で正々堂々と人生と格闘している人物があそこにいる。

彼はまるでヘラクレスのように怪力無双だ。(317)

最後に、ラ・ドゥロワールの居候のような作男、サチュルナンに触れてこの論考を終えることにしよう。

おそらく彼はずっと以前からこの農場で雇われているのであろう。だから、家族同然であり、歳をとって満足に働けなくなっているからといって彼を追い出すわけにはいかないのである。マルセイユに出奔し、帰ってきたアンジェールが地下室で赤ん坊とひそかに暮らしていることについて彼は万事を心得ている。しかし、その秘密をアメデに漏らすわけにはいかない。彼には彼なりの義理がクラリユスやフィロメヌにあるからである。そこで、自分の感情を覆い隠すように、彼はほとんどいつでも笑っているのであった。最後になって、アンジェールがアルバンとともに農場を出て行くとき、誰よりも喜びの気持を表現したのはこのサチュルナンであったということを私はぜひとも強調しておきたい。

私たちがラ・ドゥロワールを発ったのは、彼が望んでいた通り、またそれはみんなの好むところでもあったのだが、一日でもっとも出発にふさわしい時間だった。「さようなら、子どもたち」とクラリユスは言った。「赤ちゃんの足をジャケットでくるんでやるのよ」とフィロメヌは言った。そして彼らは、視線が届くかぎり私たちを見送ってくれた。サチュルナンのばか野郎は藁塚の上にあがり、腕を伸ばして手で帽子を持ち、電信機のまねごとをしていた。それはあなたに心の思いを伝えるためだった……！ (318)

うすのろのサチュルナンを物語に配置することにより、緊迫した場面にユーモアやゆとりの雰囲気が生じる。あまりに悲劇的にすぎることもなく、あまりに理想的にすぎることもないような物語を作り出そうとした作者ジオノが創作した見事な脇役がサチュルナンであった。『丘』で知恵足らずのガゲーを登場させた⁹ように、このような人物の配置はジオノの得意芸なのである。オート＝プロヴァンスの片田舎のあちこちに観察されるような物語が、こうして多彩な人物の登場と立体的な形式の採用によって完成した。その友情の度合いが尋常でないのは、これまで検討してきた通りである。その堅忍不拔の友情が成就するためには雄弁な音楽が必要不可欠だった。ジオノは『ボミュニユの男』という友情の輝かしい記念碑を建立することにより、リュシアン・ジャックたちとの友情を不滅のものにすることができたのであった。

注

¹ Jean Molino, *Celui qui va parler, la parole et le récit dans "Un de Baumugnes"*, in *Jean Giono imaginaire et écriture*, Edisud, 1985, p.22.

² "Si Albin est blancheur, si Angèle est angélique, Amédée n'est pas loin de Dieu." (*ibidem*, p.19)

³ Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Tao Amrouche*, Gallimard, 1990, p.161.

⁴ この作品はかつて翻訳されたことがあるが、その訳書（『ボオミューニュ村の男』、葛川篤訳、東京第一書房、1936年）の入手は、現在では、きわめて難しい。

⁵ このドゥロワール（Douloire）という地名は「苦しみ」を意味する *douleur* を連想させる。苦しみに打ちひしがれている農場の雰囲気をあらわすためにジオノが考案した架空の地名である。

⁶ Jean Giono, *Un de Baumugnes*, *Œuvres romanesques complètes* 1, Pléiade, 1971, pp.244-245.（これ以降、『ボミューニュの男』からの引用については、この本の頁数を示すことにする。訳文はすべて拙訳を用いる。なお、引用文については、文学的色彩を残すために漢数字を用いる。）

⁷ Jean Giono, *Radeaux perdus*, *Œuvres romanesques complètes* 1, Pléiade, 1971, pp. 533-535.

⁸ カタリ派についてはフェルナン・ニール著『異端カタリ派』（渡邊昌美訳、白水社「文庫クセジュ」、1998年）を参照されたい。

⁹ 山本省「ジャン・ジオノの『丘』の独創性」、信州大学人文社会科学研究所第2号、189-190頁参照。

（信州大学 全学教育機構 教授）

2010年1月7日受理 2010年1月28日採録決定